
双子の二人「セブンス」

レイン氷花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子の一人「セブンス」

【Zコード】

N7655E

【作者名】

レイン氷花

【あらすじ】

双子の紅と蒼。紅は病弱貧血持ちの天才！蒼は妹想いで運動神経抜群な元気な少女！この二人が揃えば最凶！？な、日常。

(前書き)

多分このシリーズは次ので終わりかと思います。読者の皆様、今までありがとうございました。

「で？ 何故お前は俺と付き合つた？」

「いや、それはだね。」

「早く言え。」

「分かつたよ。」

「てか、蒼早くその大拷問器具とつてやれ。」

「はーい。」

ガチヤン

「ふー、苦しかったよ。ありがとう、紅。」

「分かつたから早く言え。」

「せっかちだなあ、まあそれはどうでもいいや。」

涼は伸びをし、俺の田を見つめて話しだした。

涼の話は、一か月前に溯る。

ピーンポーン

「はーいー！どなたー？」

ガチヤン

「！？」

「久し振りー！..涼ちゃんー！」

ドアが勝手に開いたと思ったのにお帰りも無しいー！？

母は、僕をかなりの力で抱き締めると、これまた大音量で話しかける。

「お、かえりー..。」

ちなみに僕は窒息寸前です。

「それよりもねー！大変なのー！私の会社がーー！」

「..」

「涼ちゃん？」

「とつあえずやー、離して、ね？」

「「」みんなさっこ涼ちやん。私興奮するヒ力の加減がでもなくなるか
い。」

「とつあえず、落ち着いて話して?」

母の話はいつだ。

とつあえず前半は、会社の株価や経営状態、年収等で漬れた。

「…でね、だから私は」

「お母さん。」

「何? 急に質問なんかして?」

「せつれいと本題に入つて。」

「ああ、『」めぐらめぐ。じやあ省へと、お見合式の事になつましたー!」

「お母さんが?..」

「こころ、あなたよ?」

「嘘?..」

「本当?..」

「却下!...!...!..」

当然そんなの今したくなじよーー！

「なんどよーー？彼氏なんていった事無いのにーー！」

「それは関係無いー！」

「とにかくー涼が心に決めた人がいない限り、お見合いは止めません！！」

「そんな、馬鹿な話があるーー？」

「つべこべ言わないーー！」

はい、回想終わり。

「そんな馬鹿な話がかんのかよ？」

「あつたわけよーー！」

「それで？」

「協力してーお願いしますーー！」

「…うーん、涼がそこまで言つなりやつてあげてもいいかもな。」

「ありがとー！紅、君はやっぱり大好きだーーーーって、あれ？」

涼が俺に抱き付いた瞬間に、周りからは凄まじい殺気が溢れ出しだを感じがした。

「あの、親友として、だよ？」

一応いつ言つとかないと命にかかるし。

「なら良いよ」「

うん、言って良かった。じゃないとハツ裂きにされてたよ

「でもな〜。」

紅が考え込む様に呟く。

「どうした？紅。」

貧血か？

「いや、なんか成功する確率が低いな〜と、思つてな。」

確かに、あの人人が相手だとヤバいな。

「母さんでも騙せるくらいの作戦である？」

「あの人を騙すには並大抵の事だけではすまないからな〜。」

「なんか大変だね？」

「お前の事だらうが！」

「そでした」

「はあ、とにかくお互いの息を合わせたり、情報を知つとかないと。」

「

「もうだと思ひて、まいりの通りまとめてみたよ。」

涼は、もう言ひて国語辞典並の分厚い紙の束を出す。

「ほへ、じゃあ始めますか！」

「もうだね！」

一時間後

「なんとか出来たな。」

「そだね。」

なんとか情報は詰め込んだとして、と。

「次は細かな打ち合わせをするぞ。」

「分かった。始めよう。」

さうに一時間後

で、出来たな。

「疲れた。」

「本当に疲れたね。」

「てゅうかもう夕方だぞ？」

「今日で全て終わらすかい？」

「う～ん、…今日のしつひ終わらせよつか。」

「じゃあ、頑張ろうか。」

そうして、次の朝になった。

「さて、一眠りますか。」

訳の分からぬ書類を机に置いて、首を鳴らしながら涼は床に転がる。まさに猫の様に。

「猫かお前は。」

「そうです。猫で～す。」

床の上をハイハイで移動し、俺のベッドに這い上がる。

「俺のベッドで眠るのか？しかも朝から。」

てかこの書類何書いてるか分かんねえよ

「ふすう~

「お~、今のつてまさか。

「屁だよ。」

「な!~?」

「女に幻想見て~ると痛い目見るよ。」

「で、待てや!俺何も言つてないよなー?」

「氣ニシナーイ!」

「パクるな!~

「女だつて人間だよ?屁くじらこするよ。」

「いや、知つてるよ。」

「じゃ、お休み。」

「はあ……」

本当に寝たな。しかも五秒で、早え~。

力チャ

「起きてる?お兄ちやん。」

ドアが開いたと思ったら、桃が入って来た。

「何か用か桃？」

「え、いや、ただ様子見に来ただけ……。」

涼つてことん信用ねえな……。

「涼はもう寝たよ。」

「えー！そりなんだあ……！」

なにこの驚きよつ？

「や」座つて良い？

桃が指差したのは、さつきまで、涼が座っていた場所だ。

「良いぞ？」

「ありがと。」

桃が座ったのを見届けると、ずっと疑問に思っていた事を口にした。

「どうで、あの時は上手く出来たのか？」

桃は一瞬考えたが、すぐに思い出しても顔を輝かす。

「うん出来たよー。」

「よし、良い子だ桃。」

俺は桃の頭を撫でてあげる。

「だけどアレで良かつたの?」

「そうだ。ああでもしなきや、ストーカーをおびき寄せれないだろ?
?」

「そだね。でもチョット可哀相だったよ?」

まあ、罰つて事で。

「当然の罰だ。」

「そだね」

一瞬桃の後ろに悪魔が見えた…

「でも大変だつたよ~?セキュリティが無駄に厳しくて。」

言い忘れてたが桃はハッカーだ。しかも超一流の。

「ねえお兄ちゃん。」

「なんだ?桃。」

いきなり真剣な顔して?

「一千万もの大金どうしたら良いかな？」

「…それは、どうしたらいいのかね。マジで。」

「それがね。口座ぶつ壊しちゃったから出来ないの？」

「わお、やつやあ…

「お金が元でバレそうだな…」

「お兄ちゃん…そこは普通、大金持ちだーーって喜ぶところじゃない？」

「俺あんま金に興味ねえもん。」

「…やいですか。」

「まあ、全く無いかつて聞かれたら、少しだと答えるナビだな。

「まあ、その金は適当にどこかへ寄付する方がいいな。」

「やつ…お兄ちゃんがそいつなのね！」

「あつがとつ、お前はホント良い妹だな。」

少しがっかりしたような桃の頭を、優しく撫でてあげる。

「それよりも…」

「ん？」

「どうして涼先輩の頼みを引き受けたんですか？」

俯きながら、桃は声を低くして聞いてきた。

「…どうして…簡単な事だ。」

「？」

「友の頼みだからだ。」

「でも今回は…！」

「ああ、それでも友の困っているのを見るよりもマシだ。」

「……そう、分かった。私も涼先輩の為に協力するよ。」

「ありがとう、桃」

そう言って桃を抱き締めてあげる。

「え、お、お兄ちゃん！？」

「桃、宜しく頼むな。」

「…え、あ…うん…頑張るよ」

「よし、じやあ涼起！」^{ヒカル}始めるか！そろそろ時間だから。

そしてベッドで寝てこの涼に向かって枕を投げた。

「ばべーーー？」

「命中」

「～～～～～きなり向するんだ紅～～～」

「早く行くぞ。」

「へ、ビリビリへつてんだい？」

「お前の親んど！」。

「……正氣かい？」

「おひ。」

早こうじ終わらせねえと桃とかがつるわからだからな。

「分かった。行くよ。」

「おひ。」

涼はベッドから降りて立ち上がる。所々に寝癖をつけながら。

といつかこの短時間にすべそなをつけたな。

「お兄ちゃん? 突然ぱーっとこいついたの?」

桃が心配そうに顔をのぞき込む。

「すまんすまん。なんでもないから、涼行くぞ。」

「君が早く来い。」

ガチャ

「「「？」」」

「せあ、おはよ。」

「お疲れ様です。」

ドアが開くと、涼と鈴がそれぞれ違つ挨拶をして入ってきた。

「どうしたんだ? 蒼に鈴?」

「どうしたって… そんなの」

「涼が紅あん（君）に何かしてないか心配で来たに決まってる（じゅ
ないです）か。」

…ホントに涼って信用されてねえな。

「ククク、僕がそんな事する筈ないだろ?」

((((確かに))))

「大体、僕が好きなのは女の子だよ?」

「まあ、実際何もしなかったしな。」

「…その通りかもしれない。」

「…そうかも。」

「…そうですね。」

皆渋々といった感じで納得する。

「そんな事より、涼早く行くぞ。」

「ああ。」

「…紅どこへ行く?」

「もう涼先輩の親に会いに行くんだって。」

「早くないか?」

「大丈夫。丁度いい頃合だ。」

「そう言つ事だよ、蒼。」

涼が蒼をなだめるよつて言つ。

「心配しなくても、紅とイチャついたりはしないこと。なあっ。紅。」

「ナリタの事。」

「セリカ…なり、こいつらひしゃー。」

「おへ、こいつをめーす。」

「無理はしないようにねー?」

「分かってるので、心配しなくてもだいじょぶだからなー。」

「ククク」

そして俺と涼は家を後にした。

「ホントに遊んでるね、紅は思わず妬いてしまった。」

「どう。」

「それにしても、僕の信頼も全くと良き程無いね。」

「出来只得だ。」

「まあね」

「とにかく、手筈通りにやつて、終わらせなきゃな。」

でなきゃ後が恐えー。

「さうだね。じゃ、頑張ろつか、一人で

「はいはー。」

(後書き)

ども、お久し振りですー長い間お待たせして申し訳ありませんでした！

そして今回の出来はどうでしたか？

長い時間のせいで面白くなってしまったシヨックです。

ではではよろしくです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7655e/>

双子の二人「セブンス」

2010年10月18日03時25分発行